



## 学会設立で性暴力被害者支援体制の充実を

加納尚美さん (56)

茨城県立医療大保健医療学部看護学科教授、NPO法人理事

今年3月、性犯罪など暴力の防止や被害者支援の充実を図る「日本フォレンジック看護学会」が設立され、初めての学術集会が8月に開かれた。フォレンジック看護とは、暴力や虐待の被害者と加害者に対する、司法分野も含めた特別なケアを指す。特に学会では、性暴力被害者の支援につながる研究を活動の軸に位置付けている。理事長を務める加納尚美茨城県立医療大教授に、設立の背景や国内の現状などを聞いた。「聞き手〓植木啓太・水戸支局」

●学会設立までの経緯は。

「NPO法人『女性の安全と健康のための支援教育センター』で、性暴力被害者への対応を専門的に担う女性看護職の養成講座を2000年に国内で初めて開設した。北米では1970年代から性暴力被害者支援看護師(SANE・セイーン)の養成が始まり、日本でもSANEを広めたいという相談を持ち掛けられたことがきっかけ。現在、講座の修了者は北海道から沖縄まで約320人上っているが、日本ではまだSANEの社会的な位置付けが確立されていない。看護医療の中に根付くには研究の蓄積が必要で、支援に必要とされる能力を見える形で社会や個人に示すには、活動をさらに強化する必要があると感じた。そのためには、修了者がそれぞれ勉強してきたことや蓄積してきたことを共有し、他

職種の専門家とも議論できる学会という形が一番いい。92年には国際フォレンジック看護学会が設立されている」

●SANEの活動は。

「海外では、病院や児童相談所、自治体の相談センターなどを拠点に、被害者の話を聞いて治療の補助を行うほか、体の傷を記録し、証拠採取も行う。医師らと連携して退院に向けた計画も立て、必要であれば証人として出廷もする。SANEになるために大切なのは、被害がどのような状況で起こり、被害者がどういう心理的、社会的状態に追い込まれるのか、また医療関係者の記録が最悪の場合、どういった形で使われるのかを知っておくこと。加害者は顔見知りか圧倒的に多い。暴力の背景や構造を知らない、なかなか客観的に判断できない」

●国内での被害者支援の動きは。

「2010年4月に、被害相談から診察、告訴を考える被害者への支援を一手に担う『性暴力救援センター大阪』が開設された。24時間被害者の相談に乗り、必要であれば相談員が同伴して医療サービスを受けることもできる。福島県では、警察と医師会が協力してネットワークをつくり、被害者はネットワークに加入している医療機関に診てもらおう形。全国的に数は少ないが、支援体制が目に見える形で実現されてきた。一方で、警察に被害を申告する人自体は多くない。状況をよく分かっているのに被害届が受理されないこともある。警察でも性暴力被害者に内診を行うのは難しく、産婦人科のある医療機関の協力が必要だ」

●学会の今後の活動は。

「当面はSANEを社会の中にどう位置付けるのか考えていくほか、被害者支援の専門家間で共有すべきコアをつくる。年1回の学術集会を通じ、警察や弁護士ら他職種の関係者と交流してネットワークも築きたい。また、国内ではフォレンジック看護についてまとまったテキストがないので、学生や看護師、支援者にも役立つテキストを作成し、来年6月にも出版したい」